

研修医・指導医リレーエッセー⑱



以前の初期研修医と現在の初期研修医について

岡山中央病院臨床研修責任者 前原 信直

岡山中央病院臨床研修責任者の前原信直と申します。

岡山中央病院で、臨床研修責任者となって約10年になります。これまで、様々な初期研修医と接してきました。今回、私の初期研修医時代と現在の初期研修について考えてみました。

時代の流れとともに、初期研修医の姿勢や価値観も少しずつ変化してきました。私の初期研修医時代（平成初期）は、「医師として一人前になるために何でも学び取ろう」という気持ちで、厳しい環境の中でも自ら進んで行動する事が称賛されていました。指導医や看護師からの厳しい言葉にも真剣に耳を傾け、現場で経験を積み重ねることを何よりの成長の糧としていたように思います。誰よりも早く出勤して、誰よりも遅く退勤する。遅くまで残って勉強する。どんな言葉にも、じっと耐えて将来を思い考える。そんな時代です。患者さんの経過を自分の目で確かめたいと、夜遅くまで病棟に残る姿も珍しくありませんでした。まさに「現場で学ぶ」「背中を見て覚える」時代であり、努力と忍耐を通して医師としての力を磨いていく姿勢が根底にありました。

一方で、現在の初期研修医たちは、医療を取り巻く環境の変化の中で、より体系的で効率的な学び方を身につけています。働き方改革や教育制度の整備が進み、無理をせずに確実に経験を積めるようになりました。ICTの活用やオンライン学習も進み、最新の知識やエビデンスをすぐに取り入れられることも大きな強みです。以前のように「我慢して覚える」ではなく、「なぜそうするのか」を考えながら学ぶ姿勢が見られ、理解の深さや分析力には目を見張るものがあります。上級医との関係もよりフラットになり、疑問点を率直に尋ねたり意見を交わしたりする場面も増えました。双方向で学び合う「共に成長する教育」が、今の時代らしさを感じさせます。

ただ、便利な時代だからこそ、少し意識しておきたいこともあります。効率を重視するあまり、患者さんとじっくり向き合う時間が減ってしまうことがあります。医療の本質は、人と人との関わりの中にあります。診断や治療の技術だけでなく、患者さんの表情や声のトーン、沈黙の中にある不安を感じ取る力は、机上の学びだけでは身につけません。以前の研修医が持っていた「とにかく現場で感じ取ろう」という姿勢は、今も変わらず大切な学びの原点だと思います。

時代が違えば、学び方や姿勢、価値観も違って当然です。昔の初期研修医と今の初期研修医、どちらの姿にも素晴らしい面があります。大切なのは、「どちらかが正しい」ではなく、お互いの良さを理解し、次の世代にうまくつないでいくことだと思います。私たち指導する側も、昔ながらの良き精神を伝えつつ、今の若い医師たちの新しい感性や発想を尊重しながら、一緒に成長していける環境をつくっていききたいものです。

医師としての成長は、知識や技術だけでなく、人との関わりの中で育まれるものです。どの時代であっても、「患者さんに寄り添う心」を持つことが医師の原点であり、これからも変わらず大切にしていきたいと思います。



職業・職場説明会でのブースで
(右端が筆者)